

ぼくの見えている世界

吉水小学校 四年

吉永^{よしなが}

晴乃助^{はれのすけ}

みなさんは、拡大教科書や白黒反転時計を知っていますか。

ぼくは、生まれつき目が見えづらいため、それらの力をかりながら生活しています。この作文は、ぼくの体験をお話ししようと思います。どのくらい見えづらいかというと、お医者さんの話では、半径一メートル以内で生活している感覚だそうです。

ぼくがお母さんのおなかにいるときから、生まれるまで何も異常がなかったため、三カ月検診で大学病院を紹介された時は、お父さんもお母さんも頭が真っ白になったそうです。ネットや本をたくさん読んでも不安がつのるばかりだったそうです。ですが、ぼくが大きくなるにつれて、嗅覚や聴覚、もち前の明るさで色々なことを乗りこえていく姿を見て、「この子の情報は、ネットにはのっていない、この子の生きぬく力を育てていけばいい。」と思えたそうです。

冒頭の紹介文にもどりますが、ぼくは、通常の教科書とあわせて拡大教科書を使用しています。

拡大教科書は、通常のものより文字がひと回りからふた回り大きくいんさつされています。そのため、とにかく見やすいことがメリットです。デメリットは、文字が大きくいんさつされている分、ページ数が多いのでみんなと同じページをさがすことになれるまで時間かかります。冊数も多く、かさばります。

もう一つは、白黒反転時計です。一般的に売られている時計は、画面が白で文字が黒です。一方で白黒反転時計は、その名の通り全てが反転。画面が黒で文字が白です。その方が、文字がはつきりして見やすいです。実際にぼくは、昼間のチョウや虫は見つけづらくても、遠くはなれた夜空の星はかくにんすることができません。

以前、SF小説を読んだ時、白黒反転になっていたとても見やすかったのを覚えています。教科書も反転のものがあれば、通常のもので学習することができません。ぼくが大人になるころには、白黒反転の教科書をえらべる時代になってほしいです。そのために、ぼくができる福祉活動として出版社の方々によびかけていきたいです。

今はデジタルが主流で、ボタン一つで拡大や反転が可能ですが、紙を読んで書いて学ぶ習慣はなくならな

いでほしいです。幼いころからデジタルにふれることができる時代だからこそ、いつも見えている世界は当たり前につづくものではないということ、もう一度たくさんの人に考えてほしいです。

最後に、ぼくは通常の視力はありませんが、全く見えないわけでもありません。こういった中間そうで困っている人たちにも、光が当たる社会になっていくことをねがっています。

ふつうって何

あそ野学園義務教育学校

四年 鈴木穂乃美

「ふつう」のこと、「あたり前」のことはなんですか。みなさんの思う「ふつう」とは、なんですか。日じよう生活の中で、私はよく、「ふつうは。」という言葉を言ったり、言われたりします。きっと私の思う「ふつう」とみなさんの思う「ふつう」はちがうと思います。私はこの作文を書くにあたり、福しについて、考えました。

私のおばは、知的しょうがい者です。私が小さいころは、おばとなかよしでした。いつからかおばのする事に、「それちがうよ。」と口に出して注意することが多くなっていました。その時のおばの顔を思い出すと、悲しそうな、なぜそんなことを言うのと不安そうな顔をしていたと思います。そして、「そっかごめん。」とわらいながら、言っていました。きっとおばの「ふつう」と私の「ふつう」がちがいで、おばのこせいを受け入れる事が、できなかつたからだと思えます。「それちがうよ。」と言われた時、言い返さずに、私の感じようや思いを受け入れすぎだなと思います。今、この作文を書くことで、おばの「感じよう」「ふつう」「こせい」について、たくさん考えることができました。私が「それはちがうよ。」と言われたら、なぜ、どうして、と、とても不安な気持ちになります。相手の立場に立った時、相手の「ふつう」「こせい」を、言葉やたい度で受け入れることは、かんたんなことではないと思います。自分とちがう考えに対して、ぎ問を持つことは、悪いことではないと考えるからです。相手がとつた言動に対して、「なるほど。」と受け入れること、そして、自分の思うことや考えることを、相手に伝わるように、伝えることが、だれも

が自分の「ふつう」を相手に伝えられることが大事だと思います。

やはり、この作文を書いても「ふつう」とは何か、だれもが生きやすい社会をつくるにはどうしたらいいのか、むずかしいです。しかし、私にできることから始めていきたいと考えています。まずは相手を受け入れることから始めていき、自分とはちがう相手の考えや思いを知っていききたいです。

家族と福しについて「ふつう」について話をしました。最後まで「ふつうってなに」という質問がのこりました。私と母のせいかくはちがいます。母は人見知りですが、私はだれとでもうちとけられます。そんな私に母は、

「だれとでも明るく話ができすぎてき。」
と言ってくれました。

ふつうとは「自分がないもの」を感じたときに生れるものではないかと思えます。そして、相手を受け入れることでだれもが「ふつう」でいられる社会になるのではないかと思えます。

十人十色

城北小学校

五年

浅野^{あさの}

絢大^{げんた}

夏になって、バリアフリービーチのボランティア活動に参加しました。車いすでも海を楽しんでほしいという取り組みに興味をもったからです。話を聞いたとき、自分にお手伝いできるのか不安と緊張でいっぱいでした。でも、お年寄りや車いすの人とみんなが海水浴ができたらもっと楽しいし、素晴らしいという気持ちのほうが強くなって、勇気を出して参加することにしました。

場所は、神奈川県のカザンビーチがさきです。まず、砂浜にモビマツトを設置しました。モビマツトは、リサイクルのペットボトルから作られていて環境にやさしいです。アメリカ海兵隊の車両用に開発されたもので、重量のある車でも砂にしみません。そのため、波打ち際まで足をとられることなく、シルバーカー、ベビーカー、車いすなどで移動することができます。海まで真っ直ぐ続くモビマツトは、まるで魔法のじゅうたんのようでした。なぜなら、松葉杖や車いす

の人たちが目をキラキラさせて喜んでくれるからです。海の水をさわったのは何年ぶりだろうと、感動している人もいました。みんなの笑顔を見ていたら自分もうれしくなつて、心が温かくなりました。

海に入るには、水陸両用の車いすを使います。名前はモビチエアです。モビチエアには、パンクしにくいエア式のゴムタイヤが三個あります。ひじかけと車輪が水に浮く素材で作られていて、安全に海水浴ができるのですが、本当に浮くか心配でした。そこでぼくは、

「おぼれませんか。」
とたずねました。不安な様子のぼくに、みんなはやさしく接してくれました。そして、子どもからお年寄りまで、どんな人でも、すべての人が安心して利用できることを教えてくれました。

そして、モビチエアを囲むように四人でサポートしながら海に入ると、かん声が上がりました。不安な気持ちが一気に晴れて、自然と笑顔になりました。みんな海に入ると、会話がはずんでもっと笑顔であふれました。

この活動を通して、力を合わせて協力することの大切さを知り、誰かの役に立つことが、自分のやる気や

力につながることに気付きました。また、たくさんの人と交流することで、新たな発見や、それぞれ異なる考えがあることを学びました。おたがいに支え合うことの大切さを実感し、勇気を出してボランティアに参加してよかつたと改めて思いました。

十人十色。夏目そう石の「吾輩は猫である」にも出てくるように、みんながちがつていることを、認め合うことで理解を深め、みんなが仲良く安心して暮らせる社会にしたいです。だれもが海を楽しめるバリアフリービーチのような取り組みをこれからも続けて、夢や希望のある未来をつくりたいです。

たった一度きりの人生だから

城北小学校 六年 海原かいほら 空翔そらと

世の中には、男の人や女の人、赤ちゃん、老人など様々な人がいます。それぞれ生まれた時代や場所、国言葉も食べ物もちがいます。そのため、考え方や意見がみんなちがつていても不思議ではありません。しかし、同じことがあります。それは、だれもがたった一度きりの人生を送っているということです。

ぼくは今、友達と話すことができ、元気に小学校に行き、楽しく過ごしています。しかし実は、小さいころ言葉が出なくて、周りの子は話しているのに、ぼくは全く話すことができない時期がありました。四才を過ぎて、やっと話せるようになりました。それまでは、何を聞かれても、

「あー。」

としか言わなかったそうです。ぼくが話すことができないようになったのは、家族やうち園の先生、友達、お医者さん、トレーニンングをしてくれた先生など、多くの人の支えのおかげです。

ぼくと同じように成長がおそかった人以外にも、生まれながらに障がいがある人、生きていく中で障がいとともに生きていくことを決めた人もいます。ぼくにはまだ分からないけれど、年れいを重ねていくと、体が不自由になる、病気やけがをしやすくなる、物わすれが多くなることもあるそうです。例えば、体が不自由になって自分の好きなことができなくなったら、とても悲しいと思います。仮にぼくも、目が見えなくなる、耳が聞こえなくなる、手足が自由に動かさなくなる、ことがあつたら、大好きな友達との会話や遊びが今までのようにできなくなり、絶望し、退くつな毎日

を送ることになると思います。しかしそのような状況でも、支えてくれる人や助けてくれる人がいれば、とても心強いです。もしかしたら医学が発達して、目が見えるようになり、耳が聞こえるようになり、手足が自由に動かせるようになる、そんなことがあるかもしれない。

「自分は、一人で生きている。」と考える人もいますが、ぼくは、人は一人では生きていけないと思います。一人で生きているという人が歩いている道は、その人が作ったのでしょうか。その人が着ている服は、その人が育てた植物や動物から作ったのでしょうか。その人が飲んでいる水や使っている下水は、自分で用意したのでしょうか。きつと、たくさんの方が関わっていると思います。これだけでも、人は一人で生きていくのではなく、みんな支え合って生きていることが感じられると思います。

だれにとつても、たった一度きりの人生です。みんな仲良く楽しく生きていくためには、おたがいに協力し合い、足りていない部分を補いながら生活していくことができる社会になってほしいです。

すばらしい介護

葛生義務教育学校

六年

小松原^{こまつばら}

乃愛^{のあ}

「福祉」という言葉を辞書で調べてみると、「幸せ」と書いてありました。また、もう一つには、「公的ふ助やサービスによる生活の安定、充足」ということが書かれていました。一般的には、「公的なサービスにより生活をよりよくしていくもの」といった意味で使われているそうです。

「福祉」と聞くと、私は母の姿を思い浮かべます。私の母は、介護の仕事をしています。毎日いそがしうです。でも母は、

「大変だけど、楽しいよ。」

と言っていました。介護の仕事といっても、施設内での仕事、デイサービスの仕事などいろいろな種類があります。母は訪問介護という仕事をしています。母は仕事から帰ってくると、いつもとても疲れているので、介護なんてやめて楽な仕事をすればいいのと思うことがあります。そう思っていたころは、介護とは何をするのかよく分かっていませんでした。四年生

のときに、職業について興味をもち、母の仕事について調べたり、直接母に聞いたりしました。

訪問介護とは、高れい者や障害者などの家へ訪問し、料理やそうじ、利用者が自分ではできない家事をしたり、入浴やはいせつのお手伝いをしたりする仕事のことでだそうです。母は、

「支援をすることで利用者さんの笑顔が見られるとうれしいし、自分も笑顔になれるんだよ。」

と、まるで利用者の方の笑顔を思い浮かべているかのように、本当にうれしそうな顔で話してくれました。また、

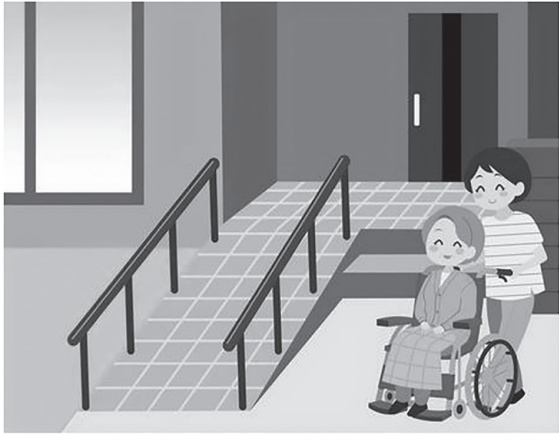
「いつまでも住み慣れた自宅に、できる限り住んでいたいとみんな思っていて、体に不自由なことがあっても介護サービスを受けることによって、安心して自宅で生活ができるんだよ。」

と教えてくれました。

この言葉を聞き、母はただお世話するだけではなく、介護に本当に必要なことは何かということや、介護される方とその家族が望んでいることはどんなことなのかということを考えて働いているのだということ強く感じました。

私は、利用者の方の気持ちを考えてみました。自分

が利用者だったら、母が教えてくれたような気持ちで接してもらえたら、自然と笑顔になります。感謝の気持ちでいっぱいになります。母は、利用者の方からたくさん感謝の言葉をいただいていると言っています。介護する側も、感謝の言葉をいただいとててもうれしいし、やりがいがあると思います。どんなに疲れても、母が仕事を続けられる理由が分かった気がしました。私にとって介護は、する側もしてもらおう側も笑顔が増える、すばらしい仕事だと思います。これから、笑顔の輪が広がってほしいです。



優 秀 賞

(中学生の部)

現在の社会福祉・将来の社会福祉

西中学校 一年 齋藤 由奈

私は去年、社会福祉協議会が主催することも会議に参加しました。こども会議では、参加しているボランティア活動や将来の福祉について話し合いました。

まず、参加しているボランティア活動は、廃品回収です。資源を無駄にしないため、街を清潔に保ち続けるために行っています。地域の人と助け合いながら活動しています。

次に、将来の福祉については、良い点と改善点について考えました。良い点は誰にでも挨拶ができてるところです。交通指導員さんなど地域の人にすすんで挨拶をするように意識しています。改善点はゴミ集積所のゴミを入れる場所にふたを設置したり、子どもたちがもっと自由に遊べる環境を作ったりしてほしいなどの意見が出ました。

私は話し合った結果、次の三つのことを考えました。一つ目は、ボランティア活動は、地域の人と心を通わ

せるためにも続けたほうがよい取り組みだということ
です。人と人の結びつきによつて、「住みたい。」
「住んでいてよかった。」と思える街になっていくと
思います。だから私は、これからも参加できるボラン
ティアについては、自ら希望して参加しようと思いま
す。

二つ目は、誰もが挨拶をしやすい環境作りのために、
「自分から挨拶」を維持しようということです。元氣
に挨拶をするとみんなが明るくなり、元氣な社会にな
ると思います。しかし、今の自分を振り返ると、私は
元氣な挨拶を毎日できているわけではありません。挨
拶はできていても、元氣がたりなかったり、気持ち
こもっていないかったりしています。だから、毎日でき
るように心がけて、維持したいと思います。

三つ目は、社会の変化に対応できるように、福祉を
続けていきたいということ。たとえば、現在、地
域の活動の中心となつている方たちもやがては高齢者
になっていきます。しかし、今後少子高齢化は進む
ことが予測されていますので、次の世代まで地域の活
動が維持できなくなってしまうかもしれません。だか
ら、今から私たち若者が地域の活動に参加することを
習慣にしたり、自分たちにできることを探したりする

ということが大切だと思っています。

私はこども会議をきっかけに、福祉について考える
ようになりました。この経験を活かし、これからも地
域のボランティア活動などに積極的に参加します。そ
して、地域の人たちと協力することで結びつきを強め、
次の世代の地域の担い手になりたいです。また、それ
らの活動を続ける上で、常に元氣に気持ちのこもった
挨拶を続けることで社会を明るく、元氣にしたいと思
います。

つながる福祉

あそ野学園義務教育学校

七年

高橋 たかはし

愛來 あいら

皆さんは、「福祉」という言葉を聞くと、何を思い
浮かべるでしょうか。私は小学三年生のときの、ある
出来事を思い出します。

その日、私は家族で旅行に出かけていました。人生
で初めて利用したバス。家族と座って話していると、
おばあさんが乗り込んできました。そのとき、道徳で
の授業を思い出し、私はおばあさんに席を譲りました。

するとおばあさんは、

「ありがとうございます。」

と、笑顔で言ってくれました。その瞬間、私も、心がぱつと温かくなつて笑顔になったことを、四年経った今でも覚えています。お礼を言ってもらえた嬉しさや、親切にした達成感が、今でも思い出せる理由なのだと思います。

それから三年経ち、小学六年生の募金活動でのことです。その頃、あまり「福祉」に対する関心がなかったのですが、ふと母に募金の話をする時、

「募金っていうのはね、巡り巡って自分のためにもなるものなんだよ。」

と教えてくれました。その言葉を聞いて、自分の中の何かが変わった気がしました。翌日、三百円を募金すると、福祉委員に

「ありがとうございます。」

と、明るい笑顔で言われました。その姿は三年前のおばあさんの姿に重なって見えました。

しかし、「福祉」とは、これらの行動のみを表す言葉ではありません。例えば、最近私の身近にある「福祉」は、祖母が通うデイサービスです。祖母は認知症で、私の言っていることが上手く伝わらなかつたり、

私に少し嫌な態度をとったりするので、私も頭では分かっていたても、つい怒ってしまうことがあります。しかし、デイサービスの職員の方々は、優しく笑顔で接してくださっていて、すごいなあ、と心から思いました。そして、デイサービスから帰ってきた祖母も、久しぶりの笑顔を浮かべていました。デイサービスから戻った祖母の笑顔を初めて見たときは、私も本当に驚いて、そして嬉しくなりました。デイサービスの方々も大変なことはあると思います。それでも、どんなときも丁寧に対応してくれて、とても安心できます。つまり「福祉」とは、人を安心させることでもあるんだなと思いました。安心させ、人の気持ちを穏やかにできるような「福祉」を、私も実践したいと思いました。

「福祉」にはさまざまな側面があります。実際に全てを実現しようとすると難しそうですが、まずは何か一つでも、取り組んでみるのが重要だと思います。それが誰かを笑顔に、良い気分させられたら、その誰かがまた他の人に親切にして、きっと素晴らしい社会になっていくでしょう。そのためにあなたも、最初の一步を踏み出してみよう。

今私が福祉のためにできること

佐野高等学校附属中学校

一年 やまだ 山田 にいな 仁唯奈

「暑いなあ」

ボランティアがこんなに大変なものだとは初めて知った。私は中学生になりこつとゆーすというボランティア研修団体に入った。小学生のころからボランティアに興味があったからだ。そして、もう一つ大きな理由がある。それは「福祉」について色んなことを知っていたからだ。

「福祉」この言葉を初めて聞いたのは小学校三年生の頃の総合の時間だった。

「福祉はどんなものの事を言うのか考えてみてね」と言われ思いうかんだ物は、ボランティア、障害者や高齢者への支援だった。福祉についてあまり考えずに毎日を過ごしていた私はこれくらいのことしか思いうかばなかった。

「普段の暮らしを幸せにする。障害者や高齢者にかかわらず、みんなが幸せなことを福祉というんだよ。」と教えてもらった時は、とてもびっくりした。ボラン

ティアや、困っている人を支援するだけではなく、地域の人にあいさつして相手を幸せな気持ちにさせることも福祉と言えるのではないか、気付いていないだけで私達が暮らしている社会には福祉であふれているのか、社会にかくれているたくさんの福祉を見つけないか、今知っている活動についても深めていきたい、そう思った。

小学校のうちには、ボランティアをするのは難しかったため、福祉フェスタなどのイベントに積極的に参加した。そこでは、音訳や手話の体験をすることができた。目が見えない、耳が聞こえない人は毎日不安に過ごしている。そんな人達に安心して生活してほしいという手話を教えてくださった先生方のお話も聞いた。ひよつとすると手話や音訳の勉強をしている私は、少しでも福祉にこうけんすることができているのではないかと思えた。とてもうれしかった。

中学生になりボランティアを体験できるようになり、こつとゆーすに入った。実際に体験してみると、ボランティアには外での活動が多く、暑い中のハードな作業だった。困っている人を助けたい。その思いだけでこのハードな作業をできている大人の方々はすごいなあと思った。私も誰かのためにつくせる大人になり

たいと思う。

今の私にできることはまだ少ない。でも今誰かのために奮闘している人はたくさんいる。だからそんな人達がいるということをお忘れずに、福祉について意識しながら生活したい。不安をかかえている人達のために、少しでも何か行動を起こすことができれば、「みんなが幸せな社会」への一歩をふみだせるはずだ。そのために私は、あいさつなどのどんなに小さいことからでも実践していききたい。みんなが幸せになれる福祉あふれる未来に向けて。

「知る」ことから始めよう

城東中学校 二年

中野^{なかの}

莉玖^{りく}

「インクルーシブ教育」という言葉を知っていますか。私は全く知りませんでした。インクルーシブ教育とは、人種や性差、障がいのあるなしにかかわらず、全ての子どもが共に学び合う教育のことです。例えば、特別支援学級・学校に通っている子が通常の学級環境で授業を受けるイメージです。その一つの例として小学校でドッジボールをやっている映像を見ました。

一見、よくある光景だと思いましたが、気になることがありました。それは、ある児童がボールを投げるときには、みんなが止まることです。実はそれはこのクラスのドッジボールのルールなのです。このクラスには全盲の子がいます。私は全盲の子と一緒にドッジボールなんてできないと思いました。しかし、このクラスでは全盲の子だけが楽しめるのも、みんな（目が見える子たち）だけが楽しめるのもよくないと感じて全員が楽しめる方法をみんなで作る、このようなルールを作りました。そして、全盲の子の「見えてる、見えていない、関係なしに仲よくなっているからうれしい」という言葉をきいて、私はこれがインクルーシブ教育なのではないかと思いました。

皆さんは自分と違う特性をもっている人のことをどう思いますか。「自分と違う人もいるんだな、そういう人にも配慮をしたほうがいいんだな」と思う人もいるかもしれませんが、「うわっ、自分と違う人がいる、少し距離をおこう」と思う人も多いと思います。では、どうしたら共に過ごすことができるのかを考えてみます。その一つのキーワードは「知ること」だと思います。全盲の子がいるクラスでは点字があることが当たり前になっていくそうです。最初は戸惑うけれども、

いつの間にかそれが「普通」になっているそうです。私たちは自分とは違う特性について、「知らない」とその人を離しがちになります。しかし、「知る」ことでどう接したらよいか分かります。

私は児童館のイベントのお手伝いに参加しています。普段、自分が接することのない幼児や小学生と一緒に過ごすことで、年齢や特性による違いに気づきます。七夕まつりでは、笹の葉に短冊をつけることができなかったり、願い事を書くことができなかったり子どもたちがいました。私は、その様子を見て子どもたちのことを知り、自分に何ができるのかを考える機会になりました。

私は、インクルーシブな社会を実現するためには、その人がどんなことを必要としているのかを考え、いろいろな選択肢を用意することが大切だと思います。その選択肢のなかで「自分で選ぶ」ことができる社会の実現が少しずつ広がっていきけるように、私は、まず「知る」ことからスタートしていこうと思います。

障がい者が暮らしやすい社会に

西中学校

二年

山本^{やまもと}

佳穂^{かほ}

私の父は、ふだん歩行器と車椅子を利用していています。私はそんな父との生活の中で気付いたことを書いてみようと思います。

私は、障がい者には不便なことが多いと思います。なぜなら、車椅子では入れない場所や入りづらい場所が多くあるからです。学校の体育館もその一つです。兄の卒業式に父が参加するため体育館に入るときに、先生方に手伝ってもらい入らなければならなかつたと母から聞きました。また、兄は部活動で剣道をしているのですが、最後になる夏の大会に、体育館に入る事ができないと聞きました。父は、兄が剣道をしている姿を見ることができず、とても残念だったことでしょう。体育館以外にも不便な場所はたくさんあります。お正月にいつも利用する外食のお店でも、お盆のお墓参りでも、段差のところまで父を車椅子ごと持ち上げなければなりません。手伝ってもらえることもあるのですが、私たち家族はなんだか申し訳ないような気持ち

になってしまいます。

一方、便利になっていけると感じることもあります。バスや車が乗りやすくなっていたり、専用のトイレがあつたりすることです。このように障がいのある家族がいなければ全く気にしないようなことが、私たちにとってはとても便利に感じられたり、不便に感じられたりします。今後、バリアフリーが進むことで、介護者の負担は大きく減らすことができるのです。

そして、障がい者や介護者にとっては、テクノロジーの進歩も待ち望まれています。例えば、手の不自由な方にとって、音声による情報伝達ができるような機能はとても利用価値があります。また、手足の不自由な人が表情だけで運転できる車椅子なども開発されているようです。障がい者を支援するテクノロジーの発展は私たちの生活を変えてくれる大きな可能性をもっています。

世の中には様々な障がいの状態があり、障がい者の人数は少しずつ増えているようです。しかし、障がい者数は人口の8%程度だという記事を見たことがあります。この数字は国民全体からすると少数かもしれませんが。そのため、障がい者のためのバリアフリーやテクノロジーを利用した開発は後回しにされてしまい

そうで、不安になります。しかし、これらのことは障がいのある人たちが少しでも過ごしやすくなるためにとても大切なことです。

SDGSの多くの項目に「障がい者」という言葉が入っています。世界の進んだ国では障がいの有無に関わらず、「誰ひとり取り残さない」社会の実現を目指しています。日本でもみんなが暮らしやすい社会が実現されたらうれしいです。



佳

作

(題名・学校名・学年・氏名)

福祉作文 佳作(小学生の部)

百四才のひいおばあちゃん	犬伏 小二年 星 琉希
「かれないチューリップ」	旗川 小二年 齋藤 葵
「ふくし」つてなあに	石塚 小二年 秋山 円花
黄色のみち	田沼 小二年 矢田部 陽生
ぼくのおとうと	吉水 小二年 佐々木 隼人
わたしにできること	あそ野 義二年 秋草 有里
駅でぼくができるふくし	天明 小三年 保倉 一馬
わたしの弟	植野 小三年 小林 美菜
「むーむー、あそぼー」	城北 小三年 横塚 春磨
みんなの気持ち	吾妻 小四年 小泉 李央莉
おねがいする勇氣	石塚 小四年 内田 悠太
ありがとうが福祉をつくる	葛生 義四年 相子 友花
「便利」をもっと身近に	佐野 小五年 桑田 京実
ぼくにできること	植野 小五年 米山 響
「わたしにできること」	界 小五年 助川 愛梨
最低限の幸福のために大切なもの	吉水 小五年 立木 美羽
この夏、私が調べた福祉について	栃本 小五年 矢島 樹奈
障がい者と社会	多田 小五年 長沼 優希実

福祉作文 佳作(中学生の部)

「車いす体験」	赤見 中一年 石井 大雅
「わたしたちと児童福祉」	佐日中等 一年 横田 樹音
ボランティア活動に参加して	南 中二年 山口 理桜
充実した生活を送るために	北 中二年 植木 健太
私たちにできること	赤見 中二年 丸山 陽愛
社会の貧困をなくすために	田沼 東中二年 粉山 楓夏
祖父母から学んだこと	あそ野 義八年 金子 心琉
私と祖母	西 中三年 長島 愛珠和
「改めて知った福祉の意味」	赤見 中三年 長沢 竜己



令和5年度 児童・生徒福祉作文作品集

「青 空」

発行日 令和6年2月1日

発行者 社会福祉法人 佐野市社会福祉協議会

この作品集は、赤い羽根共同募金の寄付によって作られています。

